

琉球の穀物起源伝承と穀物儀礼

一 はじめに

久高島と王府の穀物起源伝承 琉球一円の穀物の起源を語る伝承（神話）には、(1)久高島のシマ人（村落共同体の構成員）が伝える（またかつて伝えていた）伝承と、(2)首里王府が伝えた伝承の二種類がある。そして、この二種類の伝承の内容（モチーフ）は、相違する部分と重層・共通する部分を持っている。

なお、王府の穀物起源伝承は琉球開闢神話のなかで語られている。

久高島と王府の穀物儀礼 また、久高島では(1)シマ人が伝える（またかつて伝えていた）穀物の起源を語る伝承を踏まえて、麦と粟の穀物儀礼（初穂祭と収穫祭）ならびにその初穂祭に付随する精進を執り行っている。そして、(2)首里王府は王府が伝えた穀物の起源を語る伝承を踏まえて、麦と粟の穀物儀礼を久高島で執り行い、稲の穀物儀礼を知念・玉城で執り行っていた。そして、この久高島での穀物儀礼のうち麦の初穂祭を国王（後に代理人）が隔年に執り行い、知念・玉城での稲の穀物儀礼のうち初穂祭を国王が毎年、執り行っていた。

現行の久高島の麦と粟の穀物儀礼は、「朝拝み」（「朝祭り」とも。一日目）と「夕拝み」（「夕祭り」とも。一・二日目）から構成されている。筆者はこの「朝拝み」（ならびに初穂祭の朝拝みに付随する精進）が久高島の穀物儀礼であり、「夕拝み」が王府の穀物儀礼

だ、と想定している。なお、知念・玉城での稲の穀物儀礼もほぼ同様だった、と推定している。

久高島の麦と粟の穀物儀礼（初穂祭と収穫祭）の次第の一覧表

月 日	時刻	次 第	場 所
一日目	朝	朝拝み（朝祭りとも）	外間殿・御殿庭
	夕	初穂祭に精進が付随する 夕拝み（夕祭りとも）	外間殿・御殿庭
二日目	夕	夕拝み（夕祭りとも）	外間殿・御殿庭

本論のねらい 本論はこの久高島と王府の穀物起源伝承を記述して整理する。そして、両者のモチーフを比較してその相違点と共通点を明確にし、久高島と王府の立場を明らかにする。

そして、この二つの穀物起源伝承のあり方と久高島の麦と粟の穀物儀礼の次第（「朝拝み」と「夕拝み」）を見ると、「朝拝み」（ならびに初穂祭の朝拝みに付随する精進）が久高島の穀物起源伝承を、「夕拝み」が王府の穀物起源伝承を踏まえていて、久高島と王府の穀物起源伝承が穀物儀礼と対応していることを明らかにする。

島 山 篤

二 穀物起源伝承のモチーフ一覧

久高島と王府の穀物起源伝承のモチーフ一覧 この久高島と王府の穀物起源伝承（神話）をモチーフによって一覧にすると、「久高島と王府の穀物起源伝承のモチーフ一覧表」になる。

以下、この一覧表の順に見ていく。

久高島と王府の穀物起源伝承のモチーフ一覧表

G	F		E		D	C	B	A	モ チ ー フ	伝 承 者 ・ 出 典	現 代 の 口 頭 伝 承	久 高 島 の 世 の 書 承 伝	首 里 王 府 の 伝 承
	穀物の種物を 得た場所 (久高島外)	稲以外の場 合(久高島)	植物の種類	穀物の種類	精進(禊)の 状況	植物の入っていた 容器	植物を得た場所	植物を得た者					
容器のその後	ハタスに 埋める	ハタスに 埋める	ハタスに 埋める	ハタスに 埋める	ハタスに 埋める	ハタスに 埋める	ハタスに 埋める	ハタスに 埋める	ハタスに 埋める	ハタスに 埋める	ハタスに 埋める	ハタスに 埋める	ハタスに 埋める
	玉城の百名 (久高島外)	玉城の百名 (ミントウ家)	玉城の百名 久高田・御穂田	久高島の 所々	久高島の 所々	久高島の 所々	久高島の 所々	久高島の 所々	久高島の 所々	久高島の 所々	久高島の 所々	久高島の 所々	久高島の 所々
	ハタス	ハタス	ハタス	ハタス	ハタス	ハタス	ハタス	ハタス	ハタス	ハタス	ハタス	ハタス	ハタス
	アタカ	蒲葵・アテカ	七種類 (稲を含む)	麦・粟・ 黍・邊豆	麦・粟・ 黍・邊豆	麦・粟・ 黍・邊豆	麦・粟・ 黍・邊豆	麦・粟・ 黍・邊豆	麦・粟・ 黍・邊豆	麦・粟・ 黍・邊豆	麦・粟・ 黍・邊豆	麦・粟・ 黍・邊豆	麦・粟・ 黍・邊豆
	裸麦・粟・ 小豆・稲	大麦・小麦・ 裸麦・粟・唐 黍・小豆・稲	シキヨ	シキヨ	シキヨ	シキヨ	シキヨ	シキヨ	シキヨ	シキヨ	シキヨ	シキヨ	シキヨ
	ヤグル井で 禊・白衣	沐浴・潔身・ 白衣	沐浴・潔身・ 白衣	行水・潔身・ 白衣	齋戒・沐浴・ 白衣	清水・潔身・ 白衣	沐浴・潔身・ 白衣	沐浴・潔身・ 白衣	沐浴・潔身・ 白衣	沐浴・潔身・ 白衣	沐浴・潔身・ 白衣	沐浴・潔身・ 白衣	沐浴・潔身・ 白衣
	瓢箪	瓢箪	白壺	白壺	白壺	白壺	白壺	白壺	白壺	白壺	白壺	白壺	白壺
	伊敷泊	伊敷泊	伊敷泊	伊敷泊	伊敷泊	伊敷泊	伊敷泊	伊敷泊	伊敷泊	伊敷泊	伊敷泊	伊敷泊	伊敷泊
	赤人ミイ・ シマリ妣	赤人ミイ・ シマリ妣	シラ太郎・ 妣加那志	アナゴノ子・ (アナゴノ姥)	アナゴノ子・ (アナゴノ姥)	阿名呉之子 (阿名呉之姥)	阿名呉之子 (婦人)	阿名呉之子 (婦人)	阿名呉之子 (婦人)	阿名呉之子 (婦人)	阿名呉之子 (婦人)	阿名呉之子 (婦人)	阿名呉之子 (婦人)
	西銘豊吉	西銘シズ	安泉ナヘ	琉球国 由来記(2)	琉球国 由来記(4)	琉球國舊記(2)	琉球國舊記(3)	遺老・説傳 (久高島由来記)	中山世鑑	中山世譜	中山世鑑	中山世譜	中山世譜
	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×

※×は伝承がないことを示す。無印は伝承がないけれども、伝承があつても不自然でないことを示す。
また、「A種物を得た者」の()は助言者を示し、()は助言者でないことを示す。

J				I				H				
i 久高島行幸・魚献上など	e 黄金の瓜種	b 伊敷浜	a 思金松兼	黄金の瓜種	二月の久高島行幸の改定	四月の玉城行幸のはじまり	二月の久高島行幸のはじまり	琉球の穀物儀礼（麦の初穂祭など）のはじまり	麦が成熟した春、王に献上	久高島のイザイホーに稲藁がくるのはじまり	久高島の穀物儀礼（麦の初穂祭など）のはじまり	土石と植物による久高島の御嶽のはじまり 神の出現
				×		×						（アテカによる御嶽のはじまり）
				×		×					初穂祭でアテカと瓢箪を、収穫祭で蒲葵の葉を使う	（浦葵・アテカによる御嶽のはじまり）
				×		×				イザイホーに百名のミントウンから稲藁がくる		
				×		×	隔年に久高島行幸	二月の麦の初穂祭のはじまり	麦が成熟した春、王に献上		久高島の二月の麦の初穂祭のはじまり	植物による御嶽のはじまり 神の出現
				×	当職に変更	×	隔年に当職御使	（二月の麦の初穂祭のはじまり）	（麦が成熟した春、王に献上）			植物による御嶽のはじまり 神の出現
				×		×	隔年に久高島行幸	（二月の麦の初穂祭のはじまり）	麦が成熟した春、王に献上			植物による御嶽のはじまり 神の出現
				×		×	（隔年に久高島行幸）	（二月の麦の初穂祭のはじまり）	（麦が成熟した春、王に献上）			植物による御嶽のはじまり 神の出現
i 隔年に久高島行幸・魚献上など	c 黄金の瓜種	b 伊敷浜	a 思金松兼	黄金の瓜種		×	隔年に久高島行幸（幸魚献上など）	麦の神酒を供えて琉球中の御嶽で祭る	正月と二月に王に献上			×
				×			久高島行幸	琉球の穀物儀礼のはじまり	×	×	×	土石と植物による琉球の御嶽のはじまり 神の出現
				×	使者による代祭	下城行幸	久高島行幸	琉球の穀物儀礼のはじまり	×	×	×	

三 久高島の穀物起源伝承

1 久高島の穀物起源伝承の梗概

久高島の穀物起源伝承の梗概 まず、久高島に伝わる（またかつて伝わっていた）穀物起源伝承（神話）を見る。若干の異伝があるものの、その梗概はおよそ次のとおりである。

なお、梗概は現代の口頭伝承を優先し、近世の書承伝承を従にして述べる。また、A・Bやa・bなどは、「久高島と王府の穀物起源伝承のモチーフ一覧表」に付した記号と対応している。以下の引用に付すA・Bやa・bなども、同じである。

(A) 赤人ミリー・シマリ妣夫妻（シラ太郎・妣加那志夫妻とも、アナゴノ子・アナゴノ姥夫妻とも）がいた。

(A) 夫妻（近世の書承伝承ではアナゴノ子、あるいはシラ太郎・妣加那志夫妻）が東海岸の（B）伊敷浜（伊敷泊）にいと、（C）瓢箪（白壺とも）が寄つて来た。

夫妻が（近世の書承伝承ではアナゴノ姥の助言によってアナゴノ子があるいは妣加那志が）（D）ヤグル井（近世の書承伝承ではヤグル井と伝えたり、井戸名を伝えなかつたりする）で精進（禊）し、白衣を着てこれを手にし、その中にあつた穀物と植物の種物を得た。

(E) その穀物の種物とは麦、粟、黍、豆、稲などであり、植物の種物とは檳榔（蒲葵）、アザカ（アテカ、アデカ、アラカ、アダカとも）、シキヨ（薄・萱）である。

これらの穀物の種物のうち、（F）稲を除いた種物を久高島のハタス（ハタス原、古間口とも）に蒔き、そこで増やしてからシマ人（村落共同体の構成員）に分け与えた。（F）稲は玉城の百名に蒔いた。百名は久高島の始祖であるシラ太郎・妣加那志夫妻（兄妹でもある）

の出自地である。

(G) この瓢箪（白壺とも）をハタスに埋めた。白壺を掘り出そうとした人が死んだ。

(H) 植物の種物（蒲葵、アザカ、シキヨ）が繁茂して、久高島の御嶽のはじまりになった。

(I) すると、神（君真物）が出現し、託遊（神遊）がはじまった。

(I) 穀物のうち麦に関しては麦の初穂祭が一月（二月とも）に始まった。また、一月（二月とも）の麦の初穂祭と五月の粟の初穂祭の朝拝みでは、アザカが新穀で作った神饌を打ち払う祭具として使われ、瓢箪も新穀を詰め込む祭具として使われる。また、三月の麦の収穫祭と六月の粟の収穫祭の嶽廻りでは、蒲葵御嶽で蒲葵の葉が新穀で作った神饌を盛り付ける祭具として使われる。

また、(I) 稲を送られた百名のミントウン家からイザイホーのアリクヤー（綱）の料となる稲藁が久高島に送られてくる。

(I) 種物を蒔いて食物にし、そのうちとくに二月に熟した麦を王府に献上し、国王の喜ぶところとなった。

(I) これで神酒を作つて琉球中の御嶽に供え、琉球の穀物儀礼をした。

それで、(I) 国王は二月の麦の初穂祭を執り行うために隔年に久高島に行幸するようになった。

(I) この久高島行幸はやがて当職（代理人）に変更された。

(I) 近世の『遺老説傳』と『久高島由来記』は、これに続いて黄金の瓜種の説話を記している。

白樽（シラ太郎）は一男二女を生んだ。長男は外間根人になり、長女は祝女、次女の思樽は巫女になった。思樽は後に首里城の巫女になり、国王の寵愛を受けて懐妊する。しかし、過つて放屁したのを他の夫人たちから嘲笑され、久高島に帰った。そして、月満ちて男子を生

み、思金松兼と名付けた。

(a) 思金松兼は八歳にして王子であることを知り、入朝しようとして(b) 伊敷泊で祈った。七日目にして(e) 黄金の瓜種が寄り着いた。彼はこれを献上品にして入朝した。その時の口上は瓜の豊作を訴えるものであった。これを機に父子は名乗りを上げ、彼はやがて国王になった。

(i) それで、国王が隔年に久高島行幸をし、外間根人と祝女が国王に魚などを献上するようになった。

2 西銘豊吉氏の語り

五穀世大里の赤人ミー まず、現代の口頭伝承から上げる。

久高島の穀物の種物をもたらしたのは、大里家の元祖の赤人ミー・シミリ妣夫妻だ、といわれている。それで、大里家は「五穀世大里」と称されている。「世」とは人に幸せをもたらすもの・幸という義である。したがって、「五穀世」とは五穀の幸という義である。

この赤人ミー・シミリ妣は最近まで神人として存在し、赤人ミーは西銘豊吉氏が務めていた(シミリ妣の神女は西銘ツル子刀自で、現在も務めている)。そして、この赤人ミーは麦と粟の穀物儀礼の朝拝みで別格の位置付けをされ、また二月と二月の大主加那志(一種の穀物儀礼)でシミリ妣とともに久高島の穀物起源伝承を背景にした儀礼的な動きをしている。

このように、西銘氏が「五穀世大里」の元祖の神役を務める神人であるだけに、その語りには権威がある。

西銘氏の語り この西銘氏の語りは野本寛一「一九八四、七八・八一頁」に記載されているので、引用する。なお、筆者も西銘氏からの語りを聞いている。

(B) 穀物を得た場所…伊敷浜。(A) 穀物を得た人物…アカチユミー(夫)とシミリバー(妻)。(C) 穀物の容器…瓢箪。(D) 穀物を得た状況…アカチユミーとシミリバーがヤグルガーで禊ぎをし、白衣に改めた後得た。(E) 得た穀物の種類…裸麦・粟・小豆・米・アダカの実。(F) 蒔いた場所…裸麦・粟・小豆は久高島のハタスに蒔き、稲は玉城の百名にまかせた。(F) その後

の展開…ハタスバルで増やした種を人々に分けた。

(G) ハタスの下には種が入っていた瓢箪が埋められている。

ニライカナイからの漂着 明確に表現していないものの、久高島の観念によると東方の海上に神の国・ニライカナイ(久高島ではニラーハナーという)があり、そこから(E) 種物が(B)久高島の東海岸に漂着している。これは、以下の久高島の穀物起源伝承のすべてに通じている。

大里家の管理する聖地 この語りは大里家系統の始祖伝承に基づいており、大里家が瓢箪を得た伊敷浜の丘、禊をしたヤグル井、ハタスを聖地として管理している。

アダカによる御嶽のはじまり(E) アダカの種子も得たのに、その後が語られていない。しかし、『琉球国由来記』(2)・(4)、『琉球國舊記』(2)・(3)によると、アダカ(アテカ・アザカとも)が他の植物の種子とともに手に入り、それらが繁茂して神木になり、島の御嶽になった、と語られている。こうして見ると、ここでもアダカが繁茂して御嶽になったという語りがあった、と想定できる。

王府とのかかわりを説かない この語りは王府とのかかわりを説いていない。このことは、以下に述べる久高島の穀物起源伝承の現代の口頭伝承に共通している。

これは、一八七九年の琉球処分によって首里王府が瓦解し、国王の代理人による久高島行幸がなくなり、また王府の最高神女・聞得大君

の制度もなくなつて大君の来島がなくなつたからである。琉球処分から優に一世紀以上が経過してしまい、現在の神人たちは久高島が王府の神の島だったという認識を失っている。

3 西銘シズ刀自の語り

外間ノ口の掟神 次に、西銘シズ刀自の語りを上げる。西銘刀自は外間ノ口の掟神ウツチガミという高級神女を務め、久高島の儀礼、神歌、語りをよく知っている。西銘刀自は久高島を代表するインフォーマントである。

西銘刀自の語り この西銘刀自の語りは、①高橋六二「一九七九、三三頁」と②野本寛一「一九八四、八〇・八一頁」に記載されているので、次に引用する。また、③筆者が聞き取った語りも記す。

①昔、(B) イシキ浜イシキハマから種物が流れて来て、それを開けて見ると、(E) 大麦、小麦、裸麦、それから豆類、アテカの苗が入っていたのです。(I) この種物の中に入っていたアテカの葉っぱは、正月祭にも使います。正月祭は麦の穂上げ祭と言います。また、三月祭は、収穫がとられてから、五穀の神様にあれに入れてから、東のほうに向けていますね。外間拝殿から、あっちのほうに向けてします。久高島は五穀の発祥地と言って、ヤグルガーのあるほうは、昔はりっぱな畑だったんです。赤い土で、豆もたいへん穫れました。今はする人がいません。大里家は誰もいないですから。

島の真ん中にあるハタスというのは、五穀の発祥地だったのです。田圃はありませんです、久高島には。

②(A) アカチュミアカチュミとシマリバシマリバが、(B) 伊敷浜で (C) タ顔瓢箪タガハチを拾った。(E) 中には粟(サカアワ・モチアワ)・トイ

ンチミ・小豆・稲の種が入っていたので(F)二人は稲は百名へ渡し、他の穀物をハタスに蒔いた。よく稔ったので二人は盃一杯ずつの種を島びと達に分け与えた。

(G) ハタスの下には種が入っていた瓢箪が埋められている。

③(A) 赤人ミアカミとシマリ庇シマリヒが、(B) 伊敷浜で (C) 瓢箪を拾った。(E) 中には粟・唐黍トシメ・小豆・稲・蒲葵クハヒ・アテカの種が入っていた。(F) 粟・唐黍・小豆の種をハタスに蒔き、よく稔ったので、二人は盃一杯ずつ島人に分け与えた。島には水がないので、稲作ができない。(F) それで稲の種は実家の百名のミントウン家に渡した。

(G) ハタスの下に、種が入っていた瓢箪を埋めた。

(I) それで、三月の麦の収穫祭と六月の粟の収穫祭の嶽廻りクハヒで、蒲葵御嶽クハヒにおいて、蒲葵(檳榔)の種から生育したという蒲葵の葉に、新穀で作った神饌を盛り付け、東方のニライカナイに向けている。また、アテカの種物から生育したアテカの葉を、一月の麦の初穂祭と五月の粟の初穂祭の朝拝みで、麦と粟の新穀で作った神饌を打ち払う祭具カサにしている。また、麦と粟の種物が瓢箪に入っていたということから、一月の麦の初穂祭と五月の粟の初穂祭の朝拝みで、瓢箪に麦あるいは粟の初穂を入れ、東方のニライカナイに向けて供え、その後、祭りに参列した女性たちがこれを飲む。

大里家系統の始祖伝承 この語りも、大里家系統の始祖伝承に基づいている。

久高島の穀物儀礼のはじまり ①と②の採録は、西銘刀自の飛躍した語り口が災いし、伝承が部分的であり、①などはかなりわかりにくい。語り手の言いたい真意が③にあることは、筆者が麦と粟の穀物儀礼を実見してはじめてわかった。かほどに久高島の語りは祭祀儀礼と

緊密な関係にあり、第三者に容易に説明しがたいところがある。

西銘刀自の語りの特徴は、穀物起源伝承を島の穀物儀礼の起源とかわらせて説くところにある。まず、穀物起源伝承と穀物儀礼の起源を、(1)蒲葵^{クハバ}とのかかわりで説いている。すなわち、(Ⅰ)麦と粟の収穫祭の朝拜みで、蒲葵の葉に新穀で作った神饌を盛り付け、東方のニライカナイに向ける由来を説いている。もとより、蒲葵は神木である。

また、穀物起源伝承と穀物儀礼の起源を、(2)アテカとのかかわりで説いている。すなわち、(Ⅰ)麦と粟の初穂祭の朝拜みで、アテカの葉で麦と粟で作った神饌を打ち払う由来を説いている。

アテカはアザ力、アダ力、アデ力、アラカともいい、別にリュウキユーアオイともいう。日越国昭「一九七九、六八頁」によると、この植物はアカネ科に属し、和名をナガミボチョージという。この植物は蒲葵^{クハバ}御嶽から採取しており、神饌を扇く神具になっているので、神木ということが出来る。

さらに、穀物起源伝承と穀物儀礼の起源を、(3)瓢箪とのかかわりで説いている。すなわち、(Ⅰ)麦と粟の初穂祭で、瓢箪に初穂を入れ、東方のニライカナイに向けて供え、女性たちがこれを飲む由来を説いている。

このように、この穀物起源伝承は穀物儀礼の起源伝承にもなっている。

蒲葵とアテカによる御嶽のはじまり こうしてみると、蒲葵もアテカも神木なので、(H)蒲葵とアテカの種が繁茂して御嶽になったという語りがあつた、と想定できる。なぜなら、穀物儀礼で使用するアテカは蒲葵^{クハバ}御嶽の神木であり、穀物儀礼で使用する蒲葵も神木だからである。また、以下の書承伝承でも、漂流した容器に入っていた植物(蒲葵・アザ力・シキヨ)の種が、繁茂して御嶽になった、と語って

いるからである。

4 安泉ナヘ刀自の語り

久高ノロと東大主 次に、安泉^{ヤスモト}ナヘ刀自の語りを上げる。安泉刀自は、久高ノロと東大主^{トカグサシ}(ニライカナイの神)の神役を務める高級神女である。

安泉刀自の語り この安泉刀自の語りは、櫻井満「二〇〇〇、一四六・一四七頁」に記載されているので、次に引用する。なお、筆者も安泉刀自からこの語りを聞いている。

(A)シラタルーとファアガナシーは兄妹で、久高島の祖先である。東海岸の(B)イシキ浜で神に祈って(E)七種類の種子を得、これを栽培して子孫が繁栄した。二人の間には、男の子が一人、女の子が三人いた。男の子は外間ニツチュになり、長女ウトダルーは外間ノロ、次女ウミタルーは体が不自由だったので西銘家に分家させ、三女タルガナーは久高ノロになった。神アシャギの西のタルガナーにシラタルーがまつられていたが、神アシャギの東にアシャギを建ててシラタルーを遷し、またウブンシミにまつられていたファアガナシーを合祀した。

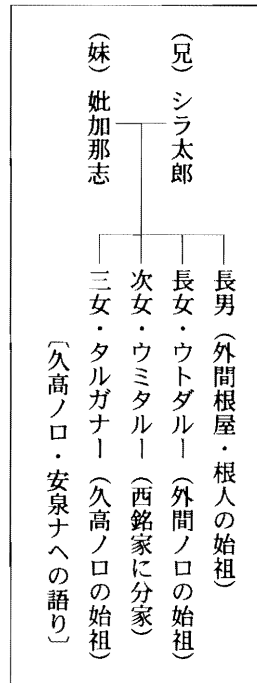
(B)イシキ浜に流れついた(E)七種類の種子のうち、(F)稲は久高島には田ができないので百名のウキンジュ(浮水)・ハインジュ(走水)のところにまいた。それが沖縄中に広まったというのが伝え話である。ミフダ(御穂田)と呼ばれているが、いわばクダカダーである。クダカダーといえは、シラタルー・ファアガナシーのムトである百名の上のミントウンにある。(Ⅰ)アリクヤの綱をつくる稲ワラはここから持つてくる。

兄妹始祖伝承と穀物起源伝承の合体 シラ太郎と妣加那志は久高島

の始祖である。玉城の百名のミントウン家の出自で、兄妹であると同時に夫妻である。その子供たちがシマの有力なヒキ、門中の始祖であると語る。この始祖伝承の語り手が久高ノロなので、この語りの主眼はシラ太郎と妣加那志の間に生まれた三女・タルガナーが久高ノロの始祖であると説くところにある。

しかし、この始祖伝承は、外間家系統の伝承と目される『遺老説傳』と『久高島由来記』に伝える始祖伝承にかなり近いものである。

安泉刀自は別の久高系統の始祖伝承も語っており、比較してみると同一人の語りであっても大きな揺れがあると思われる。



安泉刀自の語りは、始祖伝承と穀物起源伝承が合体している。

二つの久高田 本文のウキンジュの漢字は、正しくは「受水」を当てる。

「受水走水」の前の田は琉球の稲の発祥地といわれる(F)「御穂田」で、新原ピーチの傍らにある。安泉刀自の語りによると、この「御穂田」が久高島から稲種を持ち伝えた(F)「久高田」だ、と語っている。しかし、「久高田」は高台の百名のさらに上方のミントウンにある、とも語っている。事実、ミントウン家のある百名の現仲村渠には「久高田」という三坪ほどの田があり、この田から久高島を正面に望むことができる。すなわち、「久高田」が二つある、というのである。

こうしてみると、平地の「御穂田」を「久高田」とも語るの誤りのように思える。しかし、斎藤ミチ子「一九七九、三八〇頁」・斎藤ミチ子「一九九一、一二〇～一二二頁」・並木宏衛「一九七九、三七・三八頁」によると、ミントウン家の根人・知念幸徳氏は「御穂田」から採れた米を久高島に毎年「久高賦」として送っているという。すなわち、稲種をもたらしてくれた久高島に御穂田から採れた米を儀礼食として返礼しているので、百名側も御穂田の稲が久高島伝来だと認識していることになる。この他、ミントウン家の久高田から採れた米(最近は田芋)も久高島に送っている。

こうしてみると、久高島から稲の種物が伝来したという伝承を持つ田が「久高田」というべきなので、同じ伝承を持つ田が二つあればともに「久高田」を称してもいい、と考えられる。

イザイホーの綱の稲藁のはじまり 「アrikヤーの綱」とは、午歳の十一月に執り行われるイザイホーの三日目の儀礼(綱)で使われる綱のことである。(I) この綱の料となる稲藁が、百名に稲種をもたらしてくれた久高島に送られる、というのである。事実、ミントウン家の根人が久高島に久高田の稲藁を二〇束(一九七八年には三束)送っている。

このように、この穀物起源伝承は穀物儀礼の起源伝承になっているのみならず、イザイホーの儀礼(綱)の起源伝承にもなっている。

5 『琉球国由来記』(2)の語り

『琉球国由来記』 次に、近世の書承伝承を記す。

『琉球国由来記』は首里王府と各地に伝わる事物の由来、人の事蹟などを整理編集したもので、一七一三年に完成している。この文献に久高島にかかわる穀物起源伝承が四つ記されている。この四つの伝承

を掲載順に(1)～(4)と番号を付すことにする。

『琉球国由来記』(2) 以下に述べる久高島の伝承を、便宜上『琉球国由来記』(2)とする。

この伝承は『定本 琉球国由来記』「一九九七、二九頁」巻一の「二月 行幸于久高島」の項目に記載されているので、次に引用する。段落区分は筆者がした。

且久高島古老者、俗説、上古、天孫氏世代何世幾代不レ得レ考(A)アナゴノ子ト云人、彼島ニ住居始タル根人ナリ。妻者アナゴノ姥ト云。

(A) 或日アナゴノ子、漁獵ニ(B)伊敷泊ニ出時、汀ニ(C)白蜃一浮テヨリ来ヲ見テ、是ヲ取ントスルニ、不レ被レ取、又遠ク不レ離。如レ此スル事、雖レ及、兩三度、了ニ不レ取得。然ドモ不レ遠流。急ギ帰宅シテ妻ニ話ル。婦云。此蜃必由有ラン。(D)沐浴潔斎シテ、往テ是ヲ取レト云。(A)夫沐浴シテ、白衣ヲ著シ、再ビ汀ニ往向ヒ、袖ヲ攤ケ待ツ。忽然トシテ、寄来ル瀟ニ副テ、蜃輒袖ニ乗ル。取揚テ帰家、蜃ノ口ヲ開看ルニ(E)麦・粟・黍・蓮豆・檳榔・アザカ・シキヨ・七種アリ。

(F)是皆栽ユル種ト心得ヘテ、所所ニ此種子ヲ蒔ク。時ヲ得テ、皆生ルナリ。数種ノ内、麦ハ春成熟ス。(I)故二月、麦穂祭ト称、有祭礼也。粟・黍・菽、夏成熟ス。

(H)檳榔高ク、秀於諸木、アザカ・シキヨ、繁茂有テ、森嶽ト成ル。

(H)此森嶽ニ君真物出現、託遊アリ。実ニ神ノ在、玄嶽ナリ。粵ニ森嶽始建ツトナリ。此数種寄来リ、皆生長有テヨリ、百姓神ノ威光ヲ崇、悉ク信仰篤ク所レ致ト云。

(G)且此数種入タル蜃、土中ニ埋タル所アリ。石ヲ積ミ圍繞シ今ニアリ。前世、掘リ見ント望者有、嶽ヲ立ルニ、烈風吹、忽

チ為レ死者、一兩輩有ト、申伝ルナリ。

(I)此麦成熟時、捧^レ于^レ朝廷。⁽⁸⁾ 聖上詔宣ク、是レ人民養育スル穀物ト。御歛喜不^レ斜。⁽⁹⁾ (I)因^レ茲、隔年一次、二月日撰、行幸于久高島。神祇御祭礼始ルト、謂伝ナリ。行幸・還幸、共ニ御船ニテ、神唄・コエナ、アリケルト也。

久高島の古老の俗説 この伝承のはじめに「久高嶋古老」の「俗説」とあるから、この伝承が久高島の語りを記したものとわかる。アナゴノ子・アナゴノ姥 (A) アナゴノ子・アナゴノ姥夫妻は久高島に住みはじめた始祖だと語り、兄妹だったとはいっていない。しかし、赤人ミー・シマリ妣夫妻、シラ太郎・妣加那志夫妻が兄妹なので、この夫妻も兄妹だった、と考えられる。

妻の助言によって夫が種物を得る 現代の口頭伝承は、夫妻が共に種物を得たように語る。しかし、近世の書承伝承は、夫妻に役割分担があるように伝える。ここでは、(A) アナゴノ子が(B) 伊敷泊に出、妻の助言によって(D) 精進(禊)し、種物を得ている。これは以下の『琉球国由来記』(4)・『琉球國舊記』(2)(3)に共通している。

麦の初穂祭のはじまり (I)「二月、麦穂祭」とはシマ(村落共同体)で執り行う麦の初穂祭(精進祭)のことで、この条はこの麦の初穂祭のはじまりを語っている。この祭りは現行では一月に執り行っている。

久高島の御嶽のはじまり (H) (1)蒲葵(檳榔)・(2)アザカ・(3)シキヨの種物はやがて繁茂し、島の御嶽になったという。

まず、前述したように(1)蒲葵と(2)アザカは神木である。

また、(3)シキヨは薄・萱(茅)のことで、その実際の読みはシキヨだ、と考えられる。

『沖縄大百科事典(中)』「一九八三、三〇五頁」の「シチマ」の項目(湧上元雄)によると、「シチマの語源は、ススキや稲の聖名の

シキヨに小さい意のマであろう」とある。そして、この初穂祭を意味するシチマはシキヨマ、シキユマ、シチユマ、スコマともいわれている。こうしてみると、御嶽に生えるシキヨは聖なるススキのことだ、と考えられる。

また、『沖繩古語大辞典』(一九九五、三五六頁)の「すすき(薄)」の項目をみると、「口語ではグシチという。『混集』(坤・草木)に「かいん 薄之事 ごすきとも云 尾花さ共云」、また『同』(乾・飲食)に「みがん 御萱(ミゲン)なり 薄」とあるが、この「かいん」「がん」は薄の古名ゲーンと関わるもの。」とある。これを見ると、薄は萱(茅)をも含む、と考えられる。

久高島では薄をグシキという。これは、グシチ、「ごすき」と同系語で、「御シチ、御すき」、すなわち「御シキ、御シキヨ」(御薄・御萱の義)のことではなからうか。

また、久高島では薄と萱(茅)をシバ(シュバとも)ともいい、八月一〇日の柴差にはこのシバを家の内外に差して魔除けにしている。さらに、四月と九月のカンジャナシーではニライカナイからの来訪神たちが、このシバを手にして島や港を払っている。

(H) これら聖なる(1)蒲葵・(2)アザカ・(3)シキヨが繁茂して、久高島の御嶽がはじまった、というのである。

神の出現 そして、(H)この御嶽に「君真物」(神)が「出現」して「託遊」があったという。これはニライカナイからの来訪神が現身の形で久高島の御嶽に来訪し、神遊びをして神歌をうたうことを指している、と考えられる。このように、ニライカナイからの来訪神が久高島を訪れる場合、聖なる植物の繁茂する御嶽が拠点になっている。

来訪神が現身の形で久高島の御嶽に「出現」して「託遊」する現行の祭りは、四・九月のカンジャナシーである(この他、観念的に来訪神が久高島の御嶽に出現する祭りとしては、十一月のフバワクと午歳

の十一月のイザイホーがある)。

このように、この穀物起源伝承は久高島の御嶽と来訪神の出現の起源伝承にもなっている。

蒲葵・アザカ・シキヨと穀物儀礼 久高島の御嶽のはじまりとなった(1)蒲葵・(2)アザカ・(3)シキヨの植物の伝承は、後述する『琉球国由来記』(4)・『琉球國舊記』(2)・(3)とも共通している。

そして、(I)この三種の植物が久高島の麦と粟の穀物儀礼で祭具として重用されている。すなわち、(1)御嶽の蒲葵の葉は、麦と粟の収穫祭の嶽廻りにおいて、新穀で作った神饌を盛り付ける祭具になっている。また、(2)御嶽のアザカの葉は、麦と粟の初穂祭の朝拌みにおいて、新穀で作った神饌を打ち払う祭具になっている。そして、(3)シキヨの葉は、麦と粟の穀物儀礼で神女たちが座るシキダムトウ(神座)の料になっている。

このように、五穀とともに久高島に寄ってきた三種の聖なる植物が、(H)久高島の御嶽の由来になるとともに、(I)久高島の麦と粟の穀物儀礼で祭具として重用されているのは、注目すべきことである。久高島の御嶽の起源伝承は、五穀の起源伝承と一見無縁のように見えるものの、このように密接な関係にあった。

久高島行幸のはじまり この穀物起源伝承は(I)成熟した麦を首里の国王に献上し、(I)琉球の二月の麦の初穂祭のはじまりになり、それで(I)国王が久高島に行幸するようになった、と語っている。このように王府とのかかわりを説くのは、以下に記す『琉球国由来記』(4)・『琉球國舊記』(2)・(3)・『遺老説傳』・『久高島由来記』とも共通している。

ここから、王府が瓦解するまで行われた国王(あるいはその代理人)の久高島行幸が、島人の誇り・名譽だったとわかる。

玉城行幸のはじまりを説かない この伝承は(I)玉城行幸のはじ

まりを説かない。これは久高島にだけ視点が据えられているからで、この伝承が久高島の語りであることを示している。

6 『琉球国由来記』(4)の語り

『琉球国由来記』(4) 以下に述べる久高島の伝承を、便宜上『琉球国由来記』(4)とする。

この伝承は『定本 琉球国由来記』「一九九七、三〇二・三〇三頁」巻十三の「中森ノ嶽」の項目に記載されているので、次に引用する。段落区分は筆者がした。

諺曰、昔、久高島二(A)アナゴノ子ト云人アリ。久高島二住始タル根人也。

或時、(B)伊敷泊二出、詠「海原居ケルニ、浜近ク(C)白壺^{ウサ}、浮テ寄ケレバ、取揚ントスレバ、不被^レ取。歸^レ家、女房アナゴ姥二此由語ル。女房答曰、(D)行水シテ潔^レ身、着^レ白衣、往テ可^レ取ト云。故、行水シテ白衣ヲ着シ、浜ヘ出、流壺本二立寄、袖ヲ攤、スクワントスレバ、波ニヨラレ軋ク袖ニ乗ル。ヨルコビテ取アゲ、我家ニ帰リ壺ノ口ヲ開キ見レバ、(E)麦・粟・黍・扁豆之種子、且、コバ・アザカ・シキヨノ種子入ケル。

(F)取出シ、所々ヘ蒔ケル。生立ヲミレバ、件ノ喰物也。

(H)コバ・アザカ・シキヨハ、二三年ニ生立ケル。随分秘蔵シテ、人不^レ踏損ヤウニ禁ズル故、コバ、高ク秀デ、アザカ・シキヨ、茂リケル也。

(I)其比、君真物出現、度々此山ニ託遊。誠ニ神遊ノ所ト見ヘタリ。念願ヲ祈ケレバ驗アリ。ソレヨリ御嶽ヲ崇始ト也。

(G)右壺埋タル所ハ石積廻シ、今ニ有^レ之。掘リ出シ見ント望

者一兩人アリテ、罫ヲ打タテケレバ、大風吹、忽ニ病付、為^レ死者アリト、申伝也。

(I)二月、麦ノミシキヨマノ時、隔年二一次、当職御使、御祈願並御祝物、コバウノ森同前也。

諺曰 この伝承の冒頭の「諺曰」とは「昔から言い伝えられていることばに言うには」の意なので、この伝承が久高島の語りだとわかる。

『琉球国由来記』(2)と同じ話柄 この伝承の話柄は、『琉球国由来記』(2)とほぼ同じである。

この本文では、伊敷泊に出た者が夫妻かアナゴノ子一人か、判然としないものの、前出の『琉球国由来記』(2)とほぼ同じ話柄なので、(B)伊敷泊に出た者が(A)アナゴノ子一人であり、家にいる妻の助言を得て(E)種物を得ている、と解釈すべきである。

当職 (I)「当職」とは、国王の代理として久高島での祭りに参列する役職である。この語りは二月の久高島行幸のことを述べているものの、「当職」の条はこの久高島行幸を前提にしている。『琉球国由来記』(2)と『琉球国由来記』(4)はセットで理解すべき語りである。そうだとすると、(I)「麦が成熟した春、王に献上」の条もまたあつた、と想定される。なぜなら、「麦が成熟した春、王に献上」しなければ、琉球の麦の穀物儀礼がはじまらないからである。

7 『琉球國舊記』(2)の語り

『琉球國舊記』『琉球國舊記』は『琉球国由来記』に新たな資料を補った漢訳本で、鄭秉哲が一七三一年に編纂している。

この文献には、久高島にかかわる穀物起源伝承が三つ記されている。この三つの伝承を掲載順に(1)~(3)と番号を付すことにする。

『琉球國舊記』(2) 以下に述べる久高島の伝承を、便宜上『琉球國舊記』(2)とする。

この伝承は『琉球史料叢書 第三卷』[一九七二、六三頁]所収の『琉球國舊記』卷之三の「二月王幸於久高島」の項目に記載されているので、次に引用する。段落区分は筆者がした。

且俗説云。天孫氏世代。(A)有一老夫婦。其夫稱「阿名吳之子。其妻稱「阿名吳之姥。始住居久高島。常以漁獵爲業。

一日。(A)阿名吳之子。漁魚于(B)伊敷泊。時有(C)一白壺。漂來于汀邊。阿名吳之子。要往取其壺。復漂去於汀外。而不_レ得_レ撈焉。然漂來漂去。不_レ遠離去矣。阿名吳之子。奇怪之。跑走以告其妻。々曰。此壺必有_レ神靈者乎。(D)齋戒沐浴。可_レ以往取焉。由是沐浴。以穿_レ白衣。往見其壺。果然在其汀。即開衣袖。以待_レ白壺。忽隨波濤。而載其衣袖也。阿名吳之子。欣取白壺。而回家矣。(E)壺內載_レ在麥・粟・黍・邊豆・檳榔・阿佐嘉志幾與之種。

阿名吳之子。(F)默識其當播事。而播種於各處。

(I)其麥春月已熟。即獻之于_レ聖主。聖主觀喜。隔年一次。二月必幸于久高島。以行祭禮。粟・黍・菽者。至于夏月而熟矣。

(H)檳榔高秀諸樹木。阿佐嘉志幾與者。繁茂而成森嶽也。

(H)從此有_レ君眞物出現。常遊于此森嶽也。由是始建森嶽。而人民悉致崇信也。

(G)且將其白壺。埋藏土中。堆石爲圍。其跡今存。前世有人掘開。要見者。掘開一鉢。忽有_レ烈風大雷。而其人就死者一兩人云爾。然而歷代已久。莫從稽詳。

俗説云『琉球國由來記』(2)と同様、冒頭に「俗説」とあるから、久高島の語りだとわかる。

久高島行幸のはじまり (I)久高島の成熟した麦を国王に献上して、(I)国王が久高島に行幸するようになった、と語っている。この話柄は『琉球國由來記』(2)とほとんど同じである。したがって、(I)「琉球の穀物儀礼(麦の初穂祭など)のはじまり」の条もまた当然あった、と想定される。

8 『琉球國舊記』(3)の語り

『琉球國舊記』(3) 以下に述べる久高島の伝承を、便宜上『琉球國舊記』(3)とする。

この伝承は『琉球史料叢書 第三卷』[一九七二、一一五頁]所収の『琉球國舊記』卷之六の「中森嶽」の項目に記載されているので、次に引用する。段落区分は筆者がした。

俗諺曰。往昔之世。(A)有_レ阿名吳之子者。始于_レ久高島。開宅。結屋而居焉。

一日。偶往(B)伊敷泊。觀_レ咏海景。時忽有(C)一白壺。泛_レ浪而來。(A)阿名吳之子見_レ之。欲_レ撈取之。忽沉忽浮。拿着不_レ住。阿名吳之子。大奇_レ怪之。急忙回家。告婦人。婦人曰。吾聞_レ神物不_レ易_レ取得。(D)須_レ早臨清水。以_レ潔其身。穿_レ白衣。往_レ撈取之。亦有何難哉。(A)阿名吳之子。果如其言。而往其濱汀。開衣袖。要_レ撈取之。彼白壺。自轉入袖中。阿名吳之子。撈去回家。遂開而視_レ之。(E)内有_レ麥・粟・稻・扁豆・胡把・阿佐嘉志幾與之種。

阿名吳之子。(F)遂擇其地。盡播種之。

(H)禁_レ絶牛馬。不_レ敢踐踏。終致_レ蕃盛。

(H) 其時君眞物出現。而遊于此地。人有求禱者。必詣此嶽。虔誠告禱。每禱輒應。故築土爲嶽。

(G) 并于埋壺處。環垣爲記。至于近世。有人掘之。忽然大風吹起。巨濤躍舞。而不敢止。此人終得病而死焉。俗諺曰。この伝承の冒頭に「俗諺曰」とあるから、久高島の語りを記したものとわかる。

『琉球國舊記』(2)とセツト 『琉球國舊記』(3)は、(I) 久高島の麦を国王に献上したとことと (I) 久高島行幸を語っていない。しかし、『琉球國舊記』(2)とセツトで理解すべき語りなので、これらの話柄を省略した、と考えられる。

9 『遺老説傳』と『久高島由来記』の語り

『遺老説傳』と『久高島由来記』 『遺老説傳』は琉球の古老によつて語られてきた伝承を集めたもので、鄭秉哲などによつて一七四五年に歴史書『球陽』の外巻として編纂された。この書物に、久高島の穀物起源伝承が収録されている。この伝承は『球陽外巻 遺老説傳』[一九七八、一九九一三三頁] 卷二に記載されているので、次に引用する。段落区分は筆者がした。

また、『久高島由来記』は、櫻井満[二〇〇〇、一一二頁]が説くように右の『遺老説傳』に載る久高島の伝承の釈文である。この伝承は『神道体系 神社編五十二 沖繩』[一九八二、四九六五〇〇頁]に収録されているので、参照されたい。

往古の世、玉城郡百名邑に、(A) 一男人有り、乳名は白樽。賦性至孝にして操心仁義。恒に善事を爲し、敢て悪を爲さず。玉城按司、深く之れを褒美し、遂に長男免武登能按司の女を以て娶して他の妻と爲す。

一日、夫婦一同に、野に出で山に登り、光景を玩樂す。忽ち東溟の中に一小島有りて、波濤の間に隠見するを見る。白樽、深く奇とし且つ怪とし、時々其の野に出で行き、用心之れを見る。日晴れ雲散じ風和やかに波静かなれば、則ち一島を現在し、隔海甚だ近し。此の時、威勢相競ひ、干戈未だ弭まず。是に於て、白樽深く此の世の変乱を厭ひ、以て海島に通去せんとす。夫婦相共に商議し、即ち小舟に乘じ、東に向ひて行く。未だ一瞬息ならずして、早や他の島に至る。舟を繋ぎて上岸し、遍く四境を巡るに、泉甘く土肥え、野曠く山低く、宜しく邑を設け家を構へ、以て栖居を爲すべし。

而して今、食物有ること没く、日々海辺に出でて螺貝を拾取し、以て日度を致す。是れに由りて (A) 夫婦、共に (B) 伊敷泊に到り、以て子孫繁衍、食物豊饒を祈る。未だ尽くは祈り畢らざるに、倏ち (C) 一白壺の波に随ひて浮び来る有り。白樽、衣を掲げて海に入り、撈せんとするに、其の壺波間に湮没し、肯て看見せず。(A) 婦女、(D) 屋久留川に至りて其の身を沐浴し、改めて潔衣を穿ち、亦他の浜に行き、衣袖を展開して以て白壺を俟つに、白壺自ら袖上に来る。婦女、喜びて其の壺を執り、其の蓋を挖開するに、(E) 内に麦三種 (一は小麦、一は葉多嘉麦、一は大麦)・粟三種 (佐久和・餅也・和佐)・豆一種 (俗に小豆と叫ぶ) を載す。

即ち、(F) 其の種を古間口の地に播く。節、正月に届るや、麦穂出発すること、甚だ常の麦と異なる。(I) 白樽、深く之れを奇異とし、之れを禁城に奉獻す。二月に至り、其の麦已に熟し、恭しく吉旦を挾び、其の麦を奉獻す。王深く之れを喜び、而して之れを頂戴し、即ち人をして神酒を醸し、以て各処の森嶽を祭らしめ、次に百工に賜ふ。此れよりの後、五穀豊饒し、子孫繁

衍し、遂に以て邑と為る。之れを名づけて久高島と曰ふ。

(丁) 其の長女於戸兼、専ら祝女職に任じ、各嶽の祭祀を掌る。長男真仁牛は、父の家統を襲ぐ。其の子孫、延きて今世に至るまで、外間根人なり。二女思椿、巫女と為り、遂に禁城に巫女に擢でられ、日夜城内に栖居す。

其の人と為りや、生質貞静、容貌美麗にして、迥かに凡人に異なる。王、内宮に召し入れ、王夫人と為す。深く寵愛を蒙り、栄光已甚だし。是に於て、思椿懷胎す。是れに由りて諸妾、之れを嫉忌し、敢て相交話せず。一日、思椿夫人、謬りて放屁を致す。諸妾、欣々然として之れを喜び、其の謬事を將て、時々相話し、以て哂笑を為す。思椿夫人、御前に侍し難く、遂に告暇して郷に回る。往再の間、数月を歴閲し、已に臨盆の月に當る。思椿、意に想へらく、聖主の後胤を、穢処に生産すれば、恐らくは罪を獲ること有らんと。別に一座（今に至るまで外間根人の家に、其の産座猶ほ存す）を設け、一男を降誕す。名を（a）金松兼と曰ふ。長成して七歳、屢々母に向ひて父を問ふ。思椿夫人、只々汝は無父為り、我一身にて出づるのみと答ふ。年已に八歳、頻りに父親を問ひて曰く、天は、陰陽を以てして万物を生育する者なり。況んや人は皆父母有り、何を以て独身のみ父無きや。伏して乞ふ、愚父を悉らし告げよと。思椿夫人、答説すること前の如し。金松兼、再三強ひて問ふも、思椿夫人敢て告知せず。思金松兼曰く、人として父を知らざれば、人為るを得ず。活生するも益無し。何ぞ早死せざらんやと。遂に朝夕食を絶ちて痛哭す。是に於て、思椿夫人、深く其の食を絶つを憫み、細さに、寵を蒙り嫉まるるの事を告ぐ。始より終に至るまで説知すること一遍。然れども汝素より海島に生る。衣服・容貌、京都に像ず。天顔を拝睹するの願有りと雖も、志を遂ぐるに能はざらん。此の故に前日

の間訊に、敢て告知せずと。

(a) 思金松兼之れを聞き、即ち(b)伊敷泊に到り、東方に仰ぎ向ひて曰く、母は、王側に侍し、愚身を懷妊するも、倏ち小過有り、病を告げて郷に回る。今、予鄙邑に長成し、心志安んぜず。伏して祈る、天神地祇、此の惻怛に鑒み、憫を小幼に垂れ、聖主に入朝するを得れば、隆恩既る無しと。毎朝告祈して、敢て懈怠せず。

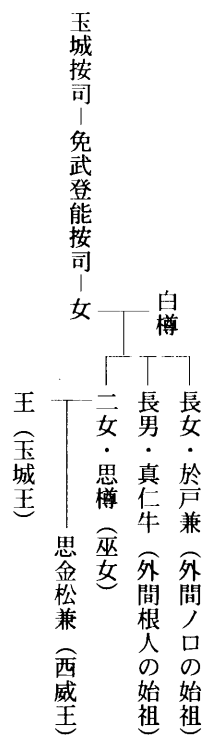
次いで七日清晨に至り、(e)黄金一物の大いに光輝を発し、波に随ひて浮来する有り。思金松兼、深く之れを奇怪とし、亦衣袖を展げて之れを撈するに、即ち(e)黄金の瓜子なり。思金松兼、大いに之れを歡喜し、即ち其の瓜子を懷にし、母に京に赴かんことを告ぐ。即刻起身し、城に入りて朝せんと請ふ。禁城の役人、或は其の髪赤く衣粗なるを哂ひ、或は癪童の妄りに城内に進むを責む。思金松兼、容貌躋々、威儀瀟々、稍しも驚惶の氣あらず、専ら入覲して題奏せんことを請ふ。諸役人、深く之れを奇怪とし、遂に之れを内院に聞し、御前に召し入る。思金松兼、直ちに其の瓜子を懷内より出し、以て献上を為して曰く、此の瓜種は、国家の至宝なり、世界の罕有なり。蓋し天甘雨を降らせ、肥土已に濕るの時、特に未だ放屁せざるの女をして此の種を播植せしむれば、則ち蕃衍茂盛し、結実甚だ夥からんと。王、大いに之れを笑ひて曰く、人此の世に生れ、誰か放屁せざらんやと。思金松兼曰く、人放屁する有るも、何の咎むることか之れ有らんと。即ち王、其の言を聴き、深く内院に至り、思金松兼を召し入れ、密かに其の縁由を問ふ。思金松兼、細さに、其の母の放屁して郷に回り、愚身を出産するの由を奏す。王其の事を聞き、以て城内に栖居せしめんとす。然れども東海小島の外夷の孩童、以て急には陸せて男と為し難し。暫く故郷に回し、以て時候を俟たしむ。

厥の後、王、世子有ること無し。遂に思金松兼を召し、封じて世子と為す。即ち大位を踐む。

(i) 是れに由りて聖主、二年に一次、親しく久高島に幸す。且つ毎年一次、外間根人並びに祝女、御仲門より、恭しく魚類数品を献す。則ち祝女を、内院に召し入れ、盛宴及び茶葉・烟草等の物を恩賜す。根人にも亦御玉貫一双を賜ふ。康熙庚子、其の献物を裁去すしか云ふ。

本格的な久高島の始祖伝承 今まで上げた近世の書承伝承では、アナゴノ子・アナゴノ姥^{フツ}夫妻が久高島の始祖として語られていた。しかし、この二つの近世の書承伝承の(A)では、白樽^{シラ太郎}(シラ太郎)夫妻が始祖として語られ、その伝承は本格的である。すなわち、白樽(シラ太郎)夫妻が戦乱を厭^{イヤ}つて、出自地の玉城^{タマシク}の百名(ミントウン家)から久高島に渡ったという。本文の免武^{メンブ}登能^{トノ}按司^{アジ}とはミントウン家の按司(領主)という義である。二人は血縁関係がないように語られているものの、本当は安泉刀自^{アサキツツミ}が語るように兄妹である。奄美・沖縄の始祖伝承のほとんどは兄妹である。島の伝承では、思金松兼は即位して西威王になっている。この伝でいくと、思樽を寵愛した王とは玉城王ということになる。

現行の久高島の始祖伝承には、(1)大里家系統の伝承、(2)久高家系統の伝承、(3)志茂門中の伝承の三つがあった。これに対して、このかつての始祖伝承は、「外間根人並びに祝女」すなわち歴代の外間根人(兄)ならびに外間ノ口(妹)が王府と特別の関係にあることの由来を説き、さらにこの外間家の巫女が国母になったことに、歴代の国王の久高島行幸の由来を求めている。そして、大里家の始祖や久高ノ口の始祖をまったく説いていない。このようにこの始祖伝承は外間家の顕揚だけを強調しているので、(4)外間家系統の伝承だといえる。



妻が種物を得る この久高島の始祖が、穀物の種物を得たという。すなわち、(A) 白樽(シラ太郎)夫妻が(B) 伊敷泊に出、子孫繁栄と食物豊饒を祈ると(C) 白壺が漂着し、(A) 妻が(D) ヤグル井で潔斎(禊)して白衣を着、(E) 種物を得ている、と伝える。これは、妻の助言によつて夫が種物を得たとする今までの近世の書承伝承と逆である。奄美・沖縄は女性が霊的に優位に立っている、このように元祖の女性が穀物の種物を得たという伝承があっても不思議でないかもしれない。

始祖伝承と穀物起源伝承の合体 以上、この語りも安泉刀自の語りと同様に始祖伝承と穀物起源伝承が合体している。したがって、この語りのモチーフとして久高島の始祖の出自である(F)百名に稲種が送られたという条があってもおかしくない。

精進の条と穀物儀礼の精進 現代の口頭伝承も近世の書承伝承も(D) 精進(禊)の状況はほぼ一致している。

(D) この精進の条に対応する儀礼が、麦と粟の初穂儀礼の朝拝み(朝祭りとも)の前に執り行われる精進^{ソジン}だ、と考えられる。すなわち、両ノ口とその子供である掟神とウンスクがヤグル井で精進し、白衣に着替え、それから島の麦と粟の初穂儀礼だと考えられる朝拝みに臨んでいる。しかし、島の穀物起源伝承の精進の条が初穂儀礼に付随する精進の由来になっているという語りは、どこにも報告されていないし、筆者も聞いていない。

由来を説くことに熱心な島にあって、初穂儀礼に付随する精進の由来を島の穀物起源伝承の精進の条に関連させて語らないのは、不思議なほどである。しかし、精進の条の主人公はシラ太郎夫妻などの三組の夫妻であり、儀礼における精進の司祭者はノロである。この溝を説明するためには、穀物儀礼の祭祀権をノロに委譲したことを語らなければならぬ。直結していない両者を説明することは、かなり迂遠なことである。また、島にあって絶対的な権威を持つノロの職掌（穀物儀礼の祭祀権）が、本来、島伝来のシラ太郎夫妻などの三組の夫妻のものだったと語るのは、よほど勇気がいることだろう。

しかし、以上の事情から、島の穀物起源伝承の精進の条が初穂儀礼に付随する精進の由来になっているという語りが、少なくともノロ制度以前にはあった、と想定できよう。

白壺と稲のその後 この語りは（G）白壺のその後と（F）稲のその後を語っていない。しかし、以上の伝承から同類の伝承があった、と想定される。

植物による久高島の御嶽のはじまり また、（H）「植物による久高島の御嶽のはじまり」も語っていない。しかし、これも同様に以上の伝承から同類の伝承があった、と想定される。

では、なぜこの伝承は（G）白壺のその後と（F）稲のその後、ならびに（H）植物による久高島の御嶽のはじまりを説かないのであろうか。それは、久高島が琉球の麦、粟、豆の発祥地であり、そのうち特に麦によって王府との強い紐帯関係を持つことを顕揚するに急がからであろう。このことは、次の（J）「黄金の瓜種」を見ることによつて一層明らかになる。

黄金の瓜種（J）「黄金の瓜種」^{コガネ、ウリザネ}は、二次的な穀物起源伝承である。それで、（a）（b）などを付して穀物起源伝承との対応関係を示した。

（a）思金松兼は島の始祖で祖母にあたる「免武登能按司の女」と同じ位相にあり、（b）伊敷泊で（e）黄金の瓜種を手し、これを梃子にして国王に面会し、王子であることを認知させている。すなわち、このように久高島と王府は強い紐帯関係にある、と主張している。

この伝承の前半の一次的な穀物起源伝承では、（I）久高島の麦を国王に献上し、（I）琉球の麦の初穂祭が始まったと語るものの、（I）久高島行幸のはじまりを語っていない。しかし、黄金の瓜種という二次的な穀物起源伝承によって久高島の男子と国王との血縁関係が明確になり、やがて国王になったことから、（i）久高島行幸や国王への魚献上などが始まった、と語っている。この（J）「黄金の瓜種」は（I）「麦が成熟した春、王に献上」に相当し、そのモチーフの反復である。このように、（E）麦だけでは飽き足らず、さらに（e）黄金の瓜種を持ち出して王権に接近することに急なのである。このため、（G）白壺のその後と（F）稲のその後、ならびに（H）植物による久高島の御嶽のはじまりを語る余裕を失っている、と考えられる。

王府との深い縁 一度のみならず、二度まで久高島と王府とのかわりを強く説き、久高島から国母と国王まで出したと語るところに、この伝承の特徴がある。

島人はこの久高島出自の国王が西威王だと語り、この語りを証すように外間殿に西威王の産屋を保存し、イザイホーでも「桶廻りのティルル①（外間殿）」で西威王の国母を賛美している。

また、久高島では尚徳王に愛された島の国笠^{クニカサ}ノロの悲劇も語っている。久高側は手を変え、品を変え、久高島が首里王府といかに縁ある特別な島であるかを強調している。

四 王府の穀物起源伝承

1 王府の穀物起源伝承の梗概

王府の穀物起源伝承の梗概 次に、王府の伝えた穀物起源伝承（神話）を見る。

王府の穀物起源伝承の代表は『琉球國中山世鑑』の伝承である。その梗概はおよそ次のとおりである。

天城に阿摩美久という神がおり、天帝から（E）土石と草木を貰って琉球島（沖縄本島とその離島）を作り、（H）そこに御嶽も作った。作られた御嶽は山原の安須森や久高島の蒲葵御嶽などで、琉球の御嶽のはじまりになった。

阿摩美久は天帝から天帝の御子の男女（兄妹）を貰い受け、人のはじめになった。そして、長男は国王、次男は諸侯、三男は百姓、長女は君々、次女は祝祝のはじめになった。

（H）キミマモンなどの神々が、定期的に出現するようになった。

（A）阿摩美久は（B）天から（E）麥（麦）・粟・菽・黍・稻（五穀）の種物を貰い、（F）麥（麦）・粟・菽・黍を久高島に植え、稲を知念大川に植え、後に玉城ヲケミゾ（受水）に植えた。

（I）麥（麦）は春に、稲は夏に実ったので、春夏に四度の祭り（麦と稲の穀物儀礼）をした。これが琉球の穀物儀礼のはじまりである。

そして、（I）国王は二月に久高島行幸、四月に知念・玉城行幸をした。これが、久高島行幸と知念・玉城行幸のはじまりである。

このうち、（I）久高島行幸はやがて使者（代理人）に変更された。

2 『琉球國中山世鑑』の語り

『琉球國中山世鑑』 『琉球國中山世鑑』は、一六五〇年に尚質王の命令によって羽地朝秀が編述した琉球最初の正史である。

この歴史書の語る穀物起源伝承（神話）は『琉球史料叢書 第五卷』〔一九七二、一三―一五頁〕所収の『琉球國中山世鑑』巻一の「琉球開闢之事」の項目に記載されているので、次に引用する。段落区分は筆者がした。

曩昔、天城二、阿摩美久ト云神、御坐シケリ。

天帝是ヲ召レ、宣ケルハ、此下二、神ノ可_レ住靈處有リ。去レドモ、未ダ島ト不_レ成事コソ、クヤシケレ。爾降リテ、島ヲ可_レ作トゾ、下知シ給ケル。阿摩美久畏リ、降リテ見ルニ、靈地トハ見ヘケレドモ、東海ノ浪ハ、西海ニ打越シ、西海ノ浪ハ、東海ニ打越シテ、未ダ嶋トゾ不_レ成ケリ。去程二、阿摩美久、天ヘ上リ、土石草木ヲ給ハレバ、嶋ヲ作りテ奉ントゾ、奏シケル。天帝、睿感有テ、（E）土石草木ヲ給リテケレバ、（H）阿摩美久、土石草木ヲ持下リ、嶋ノ數ヲバ作りテケリ。先ツ一番二、國頭二、邊土ノ安須森、次二今鬼神ノ、カナヒヤブ、次二知念森、齊場嶽、藪薩ノ浦原、次二玉城アマツ、次二久高コバウ森、次二首里森、眞玉森、次二嶋々國々ノ、嶽々森森ヲバ、作りテケリ。

數萬歳ヲ經ヌレドモ、人モ無レバ、神ノ威モ、如何デカ可_レ顯ナレバ、阿摩美久、又、天ヘ上リ、人種子ヲゾ、乞給ケル。天帝、宣ケルハ、爾ガ知タル如ク、天中二神多シト云ヘドモ、可_レ下神無シ。サレバトテ、默止スベキニ非ズトテ、天帝ノ御子、男女ヲゾ、下給。二人、陰陽和合ハ無レドモ、居處、並ガ故二、往來ノ風ヲ縁シテ、女神胎給、遂二三男二女ヲゾ、生給。長男八國ノ主ノ始也。是ヲ天孫氏ト號ス。二男八諸侯ノ始。三男八百姓ノ

始。一女ハ君タノ始。二女ハ祝タノ始也。其ヨリシテゾ、夫婦婚合ノ儀ハ、アラハレケリ。

(H) 守護ノ神モ現ジ給。キミマモンソ、稱シ奉ル。(以下、ヲボツカグラノ神・ギライカナイノ神・キミテズリ・新懸・荒神・浦マハリ・與那原ノミヲヤダイリ・月ノミヲヤダイリ・カナイノキミマモンなどの神々の出現を述べる。)

五穀ノ祭神ト申スハ、當初、穴居野處、與物相友、無有姁傷之心。未^レ知^レ稼穡、食^レ草木之實、未^レ有^レ火化、飲^レ禽獸之血、而茹^レ其毛^{ナド}シテ、人繁榮、難^レ成ケレバ、

(A) 阿摩美久、(B) 天ヘノボリ、(E) 五穀ノ種子ヲ乞下リ、(F) 麦粟菽黍ノ、數種ヲバ、初テ久高嶋ニゾ蒔給。稻ヲバ、知念大川ノ後、又玉城ヲケミゾニゾ蒔給。

去程ニ、麥ハ春ノ中、稻ハ夏ノ初二、熟シテケレバ、(I) 先ヅ天神地祇ニ、祭ントテ、七日戒、三日齋シテ、祭リテケレバ、天神地祇モ、悦ノアマリニヤ、現ジ給テ、初テ壽ヲゾシ給ケル。今在々取々、春夏四度ノ祭神、其始ナリ。

(I) 二月二久高ノ行幸、四月二知念・玉城ノ行幸モ、其ヨリシテ始リケル。是又、報^レ本返^レ始^レ之大祭也。可^レ敬々々。吾朝神國ト申ハ、此等ノ事ニ依テ也。

本格的な国家神話 この起源伝承は最も本格的な国家神話の体裁を取っている。すなわち、(1) 神の国の存在、(2) 神による国土創造、(3) 人の起源(兄妹始祖伝承)、(4) 琉球の穀物の起源の四つの要素が揃い、規模が雄大である。そして、(4) 琉球の穀物の起源では、穀物のはじまり、穀物儀礼のはじまり、久高島行幸と知念・玉城行幸のはじまりを語っている。

天城(神の国) 久高島では「神の国」は東方の海上にあるニライカナイにあり、その「神の国」観念は水平的な思考によっている。

これに対して、王府の伝承では神の国は(B)「天城^{アマノマケ}」といわれて天上にあり、その「神の国」観念は垂直的な思考によっている。そして、穀物の種物はこの天上の神の国から神の手によって地上にもたらされている。ここには、久高島レベルの「神の国」観とは異質な王府の「神の国」観がある。

琉球の御嶽のはじまり 久高島の伝承では、(H)「植物による久高島の御嶽のはじまり」が(4)穀物の起源に付随して語られ、穀物の種物とともにもたらされた植物の種物によっている。

これに対して、王府の伝承では、(H)「土石と植物による琉球の御嶽のはじまり」は神が天からもたらした土石と植物による(2)国土創造の範疇で語られている。

また、この王府の伝承で語られる琉球の御嶽は沖縄本島とその周辺の離島(久高島)に及び、王府が崇めた国家的な聖地である。久高島の代表的な蒲葵^{ボウキ}御嶽(本文では久高コバウ森)もその一つにすぎない。

琉球の神の出現 久高島の伝承では、(H)「久高島の神の出現」は「植物による久高島の御嶽のはじまり」に付随して語られている。

これに対して、この王府の伝承で語られる(H)「琉球の神の出現」は(H)「土石と植物による琉球の御嶽のはじまり」と無関係で、(3)人の起源(兄妹始祖伝承)と(4)琉球の穀物の起源の間に位置付けられている。

人の起源(琉球の兄妹始祖伝承) 久高島の伝承では、(3)人の起源・久高島の始祖は玉城百名のシラ太郎・妣加那志(兄妹)だともアナゴノ子・アナゴノ姥^{オバ}だとも、語られている。

これに対して、王府の伝承では、(3)人の起源・琉球の始祖は天帝の御子の男女(兄妹)である。そして、その長男が国王、次男が諸侯、三男が百姓、長女が君々(王府の高級神女)、次女が祝祝^{イハヒ}(王府によ

って地方に配置された神女たち)のはじまりになったと語る。すなわち、こうして琉球国の支配階級、被支配階級、神女組織の由来を語り、社会の成り立ちまで広汎に説いている。

神授の穀物を蒔いた久高島と知念・玉城 久高島の伝承で語る(4)穀物の起源(そして穀物儀礼のはじまり)はすべて久高島に発しており、近世の書承伝承はどれも久高島と王府との密接なかわりを説いている。

これに対して、王府の伝承では、神授の麥(麦)・粟などをはじめに蒔いた島が久高島なので、その地で王府が麦の穀物儀礼をしたと語る。そして、二月の麦の初穂祭(おそらくそのうちの「夕拌み」)を国王が執り行うために久高島行幸をはじめたと語る。また、神授の稲をはじめに蒔いた地が知念・玉城のツケミゾ(受水)なので、その地で王府が稲の穀物儀礼をしたと語る。そして、四月の稲の初穂祭を国王が執り行うために知念・玉城行幸をはじめたと語る。このように、久高島における(4)穀物の起源は稲を除く穀物(麦や粟など)であり、そして穀物儀礼のはじまりは、麦に関するだけであり、したがって、王府の伝承は久高島との関係だけを熱心に説いていない。

王府の伝承と久高島の穀物儀礼とのずれ 王府の伝承は、神授の麦・粟などをはじめに蒔いた島が久高島なので、その地で王府が麦の穀物儀礼をしたと語るものの、粟の穀物儀礼をしたとは語らない。すなわち、本文の「春夏四度ノ祭神」とは、久高島での麦の初穂祭と収穫祭、知念・玉城での稲の初穂祭と収穫祭を指している。このことは、『琉球國中山世鑑』を踏襲した『琉球国由来記』(1)にも記されている。

これに対して、久高島では麦の初穂祭と収穫祭、ならびに粟の初穂祭と収穫祭のいずれにも、王府の穀物儀礼と考えられる「夕拌み」がある。この王府の伝承と久高島での穀物儀礼とのずれ・齟齬をどのよ

うに考えればいかは、今後の課題である。

『琉球国由来記』(1)の伝承 右の『中山世鑑』と同じ伝承が、『琉球国由来記』(1)にも記載されている。

この伝承は『定本 琉球国由来記』「一九九七、二九頁」巻一の「二月 行幸于久高島行幸無し之年ハ、弁之嶽へ」の項目に記載されているので、次に引用する。段落区分は筆者がした。

(A) 阿摩美久(B)上天、乞下(E)五穀之種子而、
(F)麦・粟・菽・黍、数種、始蒔於久高島、芸稻於知念・玉城也。

(I) 因茲、聖上、親行幸于久高島而、有御祭礼也。
且春夏四祭、始于此。詳見于中山世鑑。

『琉球國舊記』(1)の伝承 右の『中山世鑑』と同じ伝承が、『琉球國舊記』(1)にも記載されている。

この歴史書の語る穀物起源伝承は、『琉球史料叢書 第三巻』「一九七二、六三頁」所収の『琉球國舊記』巻之三の「二月王幸於久高島」の項目に記載されているので、次に引用する。

窃按。世鑑云。(A) 阿摩美久(B)上天。(E) 請乞五穀種而降。

(F) 始播麥・粟・菽・黍於久高島。亦時稻米於知念・玉城。以民人粒食。

(I) 故 聖主親幸于久高・知念・玉城等諸嶽。以報皇天后上之恩也云爾。詳見中山世鑑。

3 『中山世譜』の語り

『中山世譜』 『中山世譜』は察鐸が一七〇一年に編述した正史で、その後も書き継がれ、最後の琉球王、尚泰までの系譜を収めている。

この歴史書の語る穀物起源伝承は、『琉球史料叢書 第四卷』「一九七二、二一頁」所収の『中山世譜』巻一の『歴代總紀』の項目に記載されているので、次に引用する。段落区分は筆者がした。

歴年亦久。(B)(E) 麥・粟・黍、天然生于久高島。稻苗生于知念・玉城。

始教民耕種。而農事興矣。(麥春熟。稻夏熟。

(I) 是故舊制。國君。每年二月。幸久高島。四月幸知念・玉城。親自致祭。以報皇天后土。成物之徳也。

(I) 康熙十二年癸丑。以道遠海阻之故。始改舊制。遣使代祭。著爲定規。

熟さない合理的な説明 この伝承では、麥(麦)・粟・黍は久高島に天然に生え、稲も知念・玉城に天然に生えたもので、王府が民に教えて農事を興したと語る。また、国王の久高島行幸、知念・玉城行幸の説明も素っ気ない。このように、この伝えは合理的に説明しようとしており、神話伝承とは言いがたい代物になっている。

しかし、もし本当に合理的な説明をしようとするなら、なぜ久高島と知念・玉城が穀物の自生地であったかを説かなければならない。それが途中で終わっているのは、穀物儀礼の由来と合理的な説明とが馴染まないことを示しているよう。この語りは熟さない合理的な説明である。

康熙十二年(尚貞王五年、一六七三年)の(I)「二月の久高島行幸の改定」(使者による代祭)は、歴史的事実である。

『琉球国由来記』(3)の伝承 右の『中山世譜』とほぼ同じ伝承が、『琉球国由来記』(3)にも記載されている。

この伝承は『定本 琉球国由来記』「一九九七、九〇頁」巻三の「五穀」の項目に記載されているので、次に引用する。段落区分は筆者がした。

当国、草昧之初、未知稼穡、食草木之実。未_レ有_二火化、飲禽獸之血、而茹_二其毛_一。後歴年数、(E)五穀種子、天然生。

(F) 麦ヲ久高島ニ栽種、稻ヲ知念大川ノ後、玉城ヲケミゾニ栽種也。

麦春熟、稻夏熟。

(I) 故自_二古_一、国君、三年兩次、二月幸_二于久高島_一、四月幸_二于知念・玉城_一。春夏祭_二于皇天后土_一、以報_二成物之功_一也。

『中山世譜』との若干の相違 この書は『中山世譜』と若干相違する点がある。すなわち、琉球のどことも知れない所に五穀の種子が自然と生え、麦を久高島に植え、稲を知念大川ノ後、玉城の受水に植えたと語る。また、粟、菽、黍にも触れていない。

以下、二月の久高島行幸と四月の知念・玉城行幸のはじまりを語る。ただし、「三年兩次」(三年に二回)の行幸があったという。これはここだけの記述で、その意味がよくわからない。

五 久高島と王府の立場

1 人の立場と神の立場

三説ある種物を得た者 久高島の伝承では(A)「種物を得た者」として、(1)シラ太郎・妣加那志夫妻(兄妹)、(2)赤人ミー・シマリ妣夫妻(兄妹)、(3)アナゴノ子・アナゴノ姥夫妻の三説がある。(1)「シラ太郎・妣加那志夫妻(兄妹)」は玉城の百名のミントウン家から出た兄妹で、この二人が久高島に渡って島の始祖になっている。このシラ太郎・妣加那志夫妻の孫が(3)赤人ミー・シマリ妣兄妹で、二人は結ばれて夫妻になり、「五穀世大里家」の始祖になっている。近世の伝承の(3)アナゴノ子・アナゴノ姥夫妻の出自家・後裔は不明であるものの、この伝でいくと、アナゴノ子・アナゴノ姥夫妻も兄妹だった、と考えられる。

穀物起源伝承と穀物儀礼の管理者 穀物の種物を得た者の子孫・後裔が、穀物起源伝承と穀物儀礼を管理する資格を持つ、と考えられる。例えば宮良高弘「一九七二、一五七・一五八頁」と畠山「一九八二、二五頁」によると、波照間島創成の伝承を持つ富嘉部落の元屋・保多盛家では、保多盛家の始祖がバルシヌフツという西海の岩の割れ目で網を用いて漂流する稲種と粟種を得たという穀物起源伝承を語り、この穀物起源伝承に基づいて、保多盛家の当主がバルシヌフツで稲と粟の穀物儀礼を執り行っている。

こうしてみると、久高島でも種物を得た者の子孫・後裔が穀物起源伝承と穀物儀礼を管理していた、と考えられる。すなわち、今日、ノロが麦と粟の穀物儀礼を司祭している。しかし、ノロ制度が施行された第二尚氏王統の始祖・尚円王の時代(一四七〇年〜一四七六年)以前には種物を得た者の子孫・後裔が穀物起源伝承と穀物儀礼を管理し

ていた、と考えられる。最近まで(2)赤人ミーとシマリ妣が健在であり、赤人ミーは穀物儀礼において新穀で作られた神酒を入れる桶の傍らにいつも位置して、「五穀世大里家」の存在を誇示していた。これはかつて赤人ミーが穀物儀礼を司祭していた名残だ、と考えられる。

また、一九七八年(昭和五三)には高齡ながら(1)妣加那志を務める神女が現存しており、それ以前に(1)シラ太郎を務める神人が存在していたという。(1)シラ太郎・妣加那志が健在だった時、彼らは何を語り、穀物儀礼でどのような役割を果たしていただろうか。おそらく赤人ミーと同じく、種物を得た者は自分の先祖のシラ太郎・妣加那志だと語り、穀物儀礼でもその存在を誇示していたろう。

このことは、近世の伝承の(3)アナゴノ子・アナゴノ姥においても同じことである。

こうしてみると、島の伝承に(A)「種物を得た者」として(1)シラ太郎・妣加那志夫妻(兄妹)、(2)赤人ミー・シマリ妣夫妻(兄妹)、(3)アナゴノ子・アナゴノ姥夫妻の三説があるのは、穀物起源伝承を伴った穀物儀礼のかつての祭祀権者が三組いたことを示しているように。

なお、ノロ以前の穀物儀礼の祭祀権を主張する者が三組いることは、興味深い問題を孕んでいるものの、今は考察を保留する。

種物を受ける人 いずれ、久高島の伝承では、東の海上の彼方にある神の国・ニライカナイから寄り物として漂着した穀物などの種物を得る者が、久高島の始祖、あるいは元家の始祖である点で共通している。すなわち、久高島の伝承では水平的な海の彼方にある神の国から種物を貰い受ける人の視点に立っている。

そして、この種物を得た者の子孫(神人)が穀物起源伝承の管理者であり、穀物儀礼のかつての司祭者であった、と考えられる。

種物を受ける阿摩美久神 これに対して、王府の語る(A)「種物を得た者」は、天上界の阿摩美久神であり、より高い神(天帝)から

五穀の種物を得ている。ただし、これは天帝との関係からみた場合であって、最終的に五穀の種物を貰い受ける人の側からみると、阿摩美久神は垂直的に天から人に穀物の種物を授ける立場に立っている。

種物を受ける始祖の長男 王府の穀物起源伝承では、琉球の始祖の長男が阿摩美久神から穀物の種物を受けたと明確に語らない。しかし、国王が王府の穀物儀礼の司祭者なので始祖の長男が最初に穀物の種物を受けたという前提があるだろう。

こうして、この穀物の種物を得た琉球の始祖の長男筋にあたる国王が、王府の穀物起源伝承の最高の管理者になり、王府の穀物儀礼の司祭者になった、と考えられる。

このように、久高島と王府の語りに、大きな開きがある。島々の頂点に立ち、琉球全域を統治する支配者には、神観念が発達し、神々の体系が整った規模雄大な神語りこそふさわしい。

久高島と王府の伝承の相違点(1) そもそも琉球の開闢神話には、(1)兄妹始祖伝承と穀物起源伝承を語る型と、(2)神の世界と国土の形成を語った後に、始祖伝承と穀物起源伝承を語る型の二つがある。前者は世(穀物の種物など)を受ける人の立場に立ち、後者は人に世を授ける神の立場に立っている。久高島の伝承は前者であり、王府の伝承は後者である。(A) この人の立場と神の立場は、久高島と王府の伝承の根本的な相違点(1)である。

種物を得た場所 したがって、(B)「種物を得た場所」もニライカナイに通じる東海岸の伊敷浜(伊敷泊)と天という大きな違いを生じることになる。

種物が入っていた容器 したがってまた、ニライカナイから久高島の伊敷浜に漂着した(C)「種物が入っていた容器」を語るのは、久高島の伝承に限られることになる。

現行の久高島の初穂祭の朝拌みで瓢箪に初穂を入れて東方に供え、

女性たちが飲んでいる。これは、瓢箪に穀物の種物が入っていたことに由来している。こうしてみると、近世の書承伝承で伝える白竜は初穂祭の朝拌みで用いた瓢箪の文飾かもしれない。

精進(禊)の状況 また、この貴重な(C)「種物が入っていた容器」を入手するために、ヤグル井で禊をし、白衣を着用したという(D)「精進(禊)」の条も、久高島の伝承に限られている。

久高島の初穂祭の精進のはじまり 前述したように、この精進の条は、麦と粟の初穂祭の朝拌みの前に執り行われる精進の起源を語っている、と考えられる。この精進とは、司祭者のノロがヤグル井で禊をし、白衣を着用することである。ノロはそれから島の初穂祭の朝拌みに臨んでいる。

容器のその後 また、(G)「容器のその後」を語るのも、久高島の伝承に限られることになる。

種物だけでなく、種物の入った容器までハタスの土中に埋めたというのは、穀物を生育させる根源的な力がハタスに籠もっていることを示しているよう。ハタスに埋めた容器を掘った人が死んだという伝承は、その穀物を生育させる根源的な力を失ってはならないところから発した祟りであり、穀物の原初の力が籠もる容器を汚すことを禁忌にしたことを示している。せつかくニライカナイから授けられた穀物の種物の生育を妨げることは、シマ人(村落共同体の構成員)の死活問題であった。

伝承の儀礼化 以上、人の立場に立つ久高島の伝承は、初穂儀礼の前に付随して執り行われる精進と穀物儀礼の朝拌み、二月の大主加那志(祭祀名)に儀礼化されている、と考えられる。

これに対して、神の立場に立つ王府の伝承は、国王を司祭者とした麦と粟の穀物儀礼の夕拌みに儀礼化されている、と考えられる。

2 穀物の種物と蒔いた場所と国家的祭祀

得た穀物の種物 (E) 「得た穀物の種物」が麦・粟・豆・黍・稻である点で、久高島と王府の伝承は重層・共通している。

久高島 また、それらの種物のうち、(F) 「稻以外の種物 (なかでも麦・粟) を蒔いた場所」が久高島である点でも、久高島と王府の伝承は共通・重層している。

伝承の儀礼化 これら二つの共通・重層のうち、とくに (F) 「麦と粟の種物とそれを蒔いた場所 (久高島)」の共通・重層が、久高島と王府が共催で麦と粟の穀物儀礼を久高島で執り行う根拠になっている、と考えられる。

久高島と王府の伝承の共通点(1) 以上、久高島と王府の伝承における (F) 「麦と粟の種物とそれを蒔いた場所 (久高島)」の共通・重層は、久高島と王府の伝承の共通点(1)である。

稲種の将来した経路 しかし、(F) 稲種は、久高島の伝承では久高島を経由して縁あるミントウン家を通じて玉城の御穂田 (あるいは二つの久高田) に蒔かれたと語るのに対して、王府の伝承では久高島を経由しないでまず知念大川に蒔かれ、次いで玉城の受水 (御穂田) に蒔かれたと語る。このように、稲種の将来した経路に関しては久高島と王府の伝承に相違がある。

稲種と玉城 しかしそれでも、結果的には (F) 「稲種を蒔いた場所」が玉城である点では、久高島と王府の伝承が重層・共通している。

イザイホーと玉城での稲の穀物儀礼 久高島では玉城百名に稲の種物を送った伝承に基づいて、(I) イザイホーの綱の儀礼に使われる稲藁が百名から送られている。これは、イザイホーが玉城での稲の穀物儀礼とかかわることを示唆している。

イザイホーは、王府の最高神女・^{キコエ オオサキ} 聞得大君に直接奉仕する島の神

女・ナンチュの成巫式である。そして、そのイザイホーの朱付け (三日目) で最終的にナンチュであることを認定するのは、国王 (あるいはその代理人の外間根人) である。これはイザイホーが国家的な祭祀であることを意味している。また、玉城の百名では王府によって稲の穀物儀礼が執り行われていた。それは久高島と同様に、百名側と王府が共催で執り行った稲の穀物儀礼 (朝拝みと夕拝み) だった、と想定される。そして、そのうち国王自らが稲の初穂祭 (おそらく夕拝み) を執り行っていた。

こうしてみると、結果的に稲種を蒔いた場所が玉城だという久高島と王府の伝承の重層・共通が、国家的な祭祀であるイザイホーと玉城での稲の穀物儀礼を結び付けている、と考えられる。

久高島と玉城百名 (ミントウン家) の交流として儀礼食の交換があるので、イザイホーの綱の料として稲藁を玉城から久高島に送るのもシマ (村落共同体) レベルあるいは門中レベルの交流とみられがちであった。しかし、これは王府瓦解後のことであり、イザイホーの綱の料として稲藁を玉城から久高島に送るのは国家的祭祀レベルのことでもあったとわかる。

このように、イザイホーが久高島の穀物起源伝承に基づいて綱の料を百名に求めているので、イザイホーがすべて王府の論理だけで成立しているとは言いえないことになる。これは、イザイホーが島の基層的な祭りである「はじめのフバワク」を土台にしていることと連動しているであろう。すなわち、イザイホーが島の祭りを基盤・母胎にして派生・誕生しているのが、王府の祭りに島の論理が混入しているも許されたであろう。

久高島と王府の伝承の共通点(2) 以上、久高島と王府の伝承における (F) 「稲の種物とそれを蒔いた最終的な場所 (玉城)」の共通・重層は、久高島と王府の伝承の共通点(2)である。

3 植物の種物と御嶽のはじまりと

穀物儀礼の祭具のはじまり

植物の種物 久高島の伝承では、(E)「得た植物の種物」は(1)蒲葵(檳榔)、(2)アダ力、(3)シキヨと限定している。

これに対して、王府の伝承では、(E)「得た植物の種物」は一般化された「草木」となっている。

御嶽のはじまり 久高島の伝承では、(H)「久高島の御嶽のはじまり」が穀物の起源に付随して語られ、穀物の種物とともにもたらされた植物の種物(1)蒲葵、(2)アダ力、(3)シキヨによって御嶽が形成されたと語る。

これに対して、王府の伝承では、(H)「土石と植物による琉球の御嶽のはじまり」は神が天城からもたらした土石と植物による国土創造の範疇に入れて語っている。

また、久高島の伝承で語られる御嶽は、久高島の御嶽だけであるのに対して、王府の伝承で語られる御嶽は沖縄本島とその周辺の離島(久高島)に及び、王府が崇めた国家的な聖地である。久高島の代表的な蒲葵御嶽も、その一つにすぎない。

神の出現 そして、久高島の伝承で語られる(H)「久高島の神の出現」は、久高島の御嶽のはじまりに付随して語られている。

これに対して、王府の伝承で語られる(H)「琉球の神の出現」は琉球の御嶽のはじまりと無関係で、人の起源(兄妹始祖伝承)と琉球の穀物の起源の間に位置付けられている。

久高島と王府の伝承の相違点(2) このように、久高島の伝承と王府の伝承における神授の草木(そして土石)による御嶽のはじまりは、一見すると発想が重層・共通しているように見えるものの、大きく相違している。この相違点が久高島と王府の伝承の相違点(2)である。

久高島の穀物儀礼の祭具のはじまり 久高島の語る(E)「植物の種物の種類(1)蒲葵、(2)アダ力、(3)シキヨ」伝承は儀礼化され、穀物儀礼の祭具のはじまりになっている。すなわち、(1)御嶽の蒲葵の葉は、麦と粟の収穫祭の朝拝みにおいて新穀で作った神饌を盛りつける祭具になっている。また、(2)御嶽のアダ力の葉は、麦と粟の初穂祭の朝拝みにおいて新穀で作った神饌を打ち払う祭具になっている。そして、(3)シキヨ(薄・萱)は、麦と粟の穀物儀礼で神女たちが座るシキダムトウ(神座)の料になっている。

久高島では、シキダムトウ(神座)は神女たちが腰を掛ける「敷きダムトウ(座)」だ、と理解されている。しかし、前述したようにシキはシキヨ(薄・萱の聖名)と同語だ、と考えられる。また、『琉球古語大辞典』「一九九五、三二八頁」の「しけ」と「しげだもと」の項目には、「しけ」は「聖所、神の在所。(中略)「しけ」は慣用化するうちに「しげ」で、「聖なる」の意の美称辞として使われるようになり、「しげだもと」は古語でもあって、「聖なるたもと」。「たもと」は神の憑く依り代などという。なお、久高島では(中略)新タムトウ神はシキダムトウに(茅を束ねた敷物)に座す」とある。こうしてみると、久高島のシキダムトウはシキヨ(聖なる薄・萱)で作ったタムトウ(依り代・座)という義だ、と考えられる。

このように、久高島の伝承が語る(1)蒲葵、(2)アダ力、(3)シキヨの種物は、久高島の御嶽のはじまりを語るのみならず、久高島の穀物儀礼の祭具のはじまりをも語り、穀物起源伝承として収斂されている。

これに対して、王府の伝承では、天城から授けられた「草木」は琉球の主要な御嶽のはじまりを語るだけで、王府の穀物儀礼とどうかかわるかを語っていない。

久高島と王府の伝承の相違点(3) 以上、久高島の語る(E)「植物の種物」は御嶽のはじまりを語るのみならず、穀物儀礼の祭具のはじ

まりを語るのに対して、王府の語る(E)「種物の植物」の「草木」は琉球の主要な御嶽のはじまりを語るだけである。この相違点が久高島と王府の伝承の相違点(3)である。

4 久高島と王府の穀物儀礼のはじまり

類型的な伝承 漂着した穀物の種物を栽培し、これが島の穀物儀礼のはじまりになったという伝承は、『粟国村誌』(一九八四、二七五～二七七頁)に採録される粟国島のヤガン折目(粟の収穫祭)の由来譚、『波照間島民俗誌』(一九七二、一五七・一五八頁)に採録される稲と粟の由来譚などにあり、類型的である。したがって、(A)～(G)「久高島の海岸に漂着した穀物の種物を栽培し」、これが(Ⅰ)「久高島の穀物儀礼(麦の初穂祭など)のはじまり」になったという伝承も、類型的である。

伝承の儀礼化 この久高島の類型的な穀物起源伝承は、麦と粟の穀物儀礼の朝拝み(ならびに初穂祭の朝拝みに付随する精進)と二月の大主加那志(祭祀名)に久高島の祭祀として儀礼化されている。

王府への接近 しかし、(Ⅰ)「島人がその熟した麦を国王に献上し、それが基になって国王が久高島に行幸して王府の麦の初穂祭を執り行った」と語る部分が、琉球一円の類型と相違している。すなわち、久高島は島の穀物起源伝承のうち、麦を梃子にして王権に大きく接近し、(Ⅰ)「久高島の麦の初穂祭」に(Ⅰ)「王府の麦の初穂祭」を加上したと強調している点が、特別なのである。これは具体的には、久高島の麦の初穂祭である朝拝みに王府の麦の初穂祭である夕拝みを加上したことを意味している。この語りは、久高島と王府が島の麦の初穂祭である朝拝みと王府の麦の初穂祭である夕拝みを一連の祭祀として執り行う根拠を、久高島側から示したものである。

しかし、この語りはいささか性急で、舌足らずである。久高島と王府の執り行う実際の穀物儀礼は麦と粟の初穂祭と収穫祭(四つ)であり、いずれにも久高島の祭祀である朝拝みと王府の祭祀である夕拝みがある。そして、このうち麦の初穂祭である夕拝みを国王が直接執り行っていた。したがって、右の久高島の伝承は、久高島と王府の共催したこの麦と粟の四つの穀物儀礼の朝拝みと夕拝みのうち、とくに麦の初穂祭の夕拝みを国王が直接執り行った由来だけを語ったものだとわかる。

このように、久高島の伝承はとくに国王が久高島に行幸する麦の初穂祭の由来を語ることに熱心である。

王府への再接近 この点、『遺老説傳』と『久高島由来記』に伝える(Ⅱ)「黄金の瓜種」の伝承も同じである。すなわち、この伝承は久高島の穀物起源伝承の応用であり、これによって過剰なほどに王府への接近を反復し、国王が久高島に行幸する麦の初穂祭の由来を熱く語っている。また、久高島の神女が国王の后になり、その生んだ男子(王子)が国王にまで登りつめたと言語するのは、島人が王府にいかに接近しようとしているかを示している。

王府の立場 これに対して、王府の伝承は、久高島が神授の麦・粟などを蒔きはじめた所なので王府が久高島で麦の穀物儀礼(初穂祭と収穫祭)を執り行い、そのうち国王が初穂祭を直接執り行うために久高島に行幸し、知念・玉城が神授の稲を蒔きはじめた所なので王府が知念・玉城で稲の穀物儀礼(初穂祭と収穫祭)を執り行い、そのうち国王が初穂祭を直接執り行うために知念・玉城に行幸したと語る。

このように、王府の穀物起源伝承は久高島の穀物起源伝承と関係なく、島々の頂点に立つ支配者としての立場を冷徹に明示している。

王府の伝承の儀礼化 この王府の穀物儀礼のはじまりを語る伝承は、久高島では麦と粟の穀物儀礼の夕拝みで王府の祭祀として儀礼化

され、知念・玉城でも稲の穀物儀礼で王府の祭祀として、おそらくは久高島と同様の形式、すなわち夕拝みで儀礼化されていた、と考えられる。

ただし、前述したように王府の伝承と久高島の現行の穀物儀礼との間には、粟の穀物儀礼においてずれ・齟齬を生じている。

久高島と王府の伝承の共通点(3) 以上、久高島と王府の伝承における(Ⅰ)「琉球の穀物儀礼(麦の初穂祭など)のはじまり」、(Ⅱ)「二月の久高島行幸のはじまり」、(Ⅲ)「二月の久高島行幸の改定」の重層・共通は、久高島と王府の伝承の共通点(3)である。

穀物起源伝承と穀物儀礼の対応の片寄り 以上、穀物起源伝承と穀物儀礼と対応しているのは、久高島の事例に集中しており、王府の事例にはほとんど見られない。王府の事例では、精々、国王が夕拝みの司祭者であった根拠を穀物起源伝承に求められる、と推測した程度である。この片寄りは島の伝承を陽画のように、王府の伝承を陰画のように浮き彫りにしており、島の儀礼と王府の儀礼の相違を弁別している、と考えられる。

なお、今後、久高島の穀物儀礼を記述して整理し、次いで島と王府の穀物起源伝承を対比することで、さらに島の儀礼と王府の儀礼の弁別がつけられる、と予想される。

穀物起源伝承と穀物儀礼の古層と新層 こうしてみてみると、久高島を場とする穀物起源伝承と穀物儀礼の新旧が浮き彫りになる。

まず、古層の穀物儀礼として久高島だけの穀物儀礼の時代があった、と想定できる。その司祭者は穀物の種物をはじめに得た始祖を祭る神人(アナゴノ子・アナゴノ姥夫妻、シラ太郎・妣加那志夫妻、赤人ミ・シマリ妣夫妻)である。そして、その儀礼は現行の朝拝み(ならびに初穂祭の朝拝みに付随する精進)の前身であった、と考えられる。

この古層の穀物儀礼と対応する穀物起源伝承が、(A)「種物を得た者」から(Ⅰ)「久高島の穀物儀礼(麦の初穂祭など)のはじまり」までのモチーフである。

やがて、この久高島の古層の穀物儀礼に王府の穀物儀礼を加上する時代が到来する。それは尚円王(一四七〇年～一四七六年)のノロ制度が確立した時代で、まずこのノロが久高島の穀物儀礼の祭祀権を得て、司祭者になった、と考えられる(ただし、久高島の穀物起源伝承の管理権まで掌握していない)。その儀礼が、現行の朝拝み(ならびに初穂祭の朝拝みに付随する精進)である。

そして、王府は王府の立場で穀物起源伝承を語り、これを根拠に久高島で麦と粟の穀物儀礼を執り行った。その儀礼は現行の夕拝みに相当しており、このうち、麦の初穂祭の夕拝みを国王自らが隔年に直接執り行っていた。

したがって、ノロが司祭する朝拝み(ならびに初穂祭の朝拝みに付随する精進)、ならびに王府が司祭する夕拝みは、王府がノロ制度を立ち上げてから設けられた新層の祭祀だとわかる。

この新層の穀物儀礼と対応する穀物起源伝承が、久高島の伝承では(Ⅰ)「麦が成熟した春、王に献上」、(Ⅱ)「琉球の穀物儀礼(麦の初穂祭など)のはじまり」、(Ⅲ)「二月の久高島行幸のはじまり」、(Ⅳ)「二月の久高島行幸の改定」、(Ⅴ)「黄金の瓜種」であり、王府の伝承では(A)「種物を得た者」、(B)「種物を得た場所」、(C)「得た穀物と植物の種物の種類」、(D)「穀物の種物を蒔いた場所(稲以外の場合)」、(Ⅰ)「琉球の穀物儀礼(麦の初穂祭など)のはじまり」、(Ⅱ)「二月の久高島行幸のはじまり」、(Ⅲ)「二月の久高島行幸の改定」である。

六 結び

久高島と王府の穀物起源伝承 以上、久高島と王府の穀物起源伝承（神話）を記述して整理した。そして、両者のモチーフを比較してその相違点と共通点を明確にし、久高島と王府の立場を明らかにした。

久高島と王府の穀物儀礼 そして、久高島において、(1)島の穀物起源伝承を踏まえて一日目に麦と粟の穀物儀礼（初穂祭と収穫祭）の「朝拝み」（ならびに初穂祭の朝拝みに付随する精進）を執り行い、

(2)首里王府は王府の穀物起源伝承を踏まえて一・二日目に麦と粟の穀物儀礼（初穂祭と収穫祭）の「夕拝み」を執り行っていた、と想定した。

王府の神の島 当然、この「夕拝み」には聞得大君などの王府の高級神女が参列し、とくに麦の初穂祭の「夕拝み」には国王（その代理人）も参列していた。すなわち、久高島が王府の神の島になりうるのは、このように王府の麦（と粟）の穀物儀礼を筆頭とした王府関連の祭りが執り行われたからだ、と考えた。

王府の神の島の一般神女組織の拡充と再編 そして、この王府を体する貴人たちの執り行う祭祀（麦と粟の穀物儀礼を筆頭とした王府関連の祭り、とくに麦の初穂祭）に奉仕するために、一般神女組織が拡充・拡大され、その組織再編のための祭りとしてフバワク・イザイホー・タムトウ祝いが形成された、と考えた。すなわち、王府の麦（と粟）の穀物儀礼などの王府関連の祭りを執行することが目的であり、一般神女組織を再編する祭り（フバワク・イザイホー・タムトウ祝）は、そのための手段なのである。したがって、王府の麦（と粟）の穀物儀礼などの王府関連の祭りの成立と王府の神の島の一般神女組織を再編する祭りの成立は、同一基盤を持ち、それらの成立時期もほぼ軌を一にしている、ということになる。

もう一つの王府の伝承 琉球の穀物起源伝承が王府の穀物儀礼のは

じまりになったという王府の伝承が、もう一つ、王府の編纂した『聞得大君御殿并御城御規式之御次第』〔『神道体系 神社編五十二 沖縄』一九八二、二六九・二七〇頁〕に記されている。これは、(1)久高島の穀物起源伝承が五月五日の雨粕を食べる儀礼ならびに九月の麦初穂子の儀礼のはじまりになったこと、(2)玉城の稲の起源伝承が久高島行幸（麦の初穂祭）ならびに知念・玉城行幸（稲の初穂祭）のはじまりになったこと、(3)琉球の国土創成、御嶽のはじまり、人の起源（琉球の始祖伝承）を記している。そのモチーフは、今まで述べてきた王府の伝承を踏まえながらも、シマ（村落共同体）の伝承を大きく取り込んでいる。また、王府における儀礼の具体的なあり様がかなり明瞭にうかがえる。

しかし、神の国観念に混乱があり、久高島行幸、知念・玉城行幸の由来譚としても首尾一貫していない。また、国土創成の伝承も正史の伝承（『琉球國中山世鑑』）と不即不離で、かなり緊密さに欠けている。この『聞得大君御殿并御城御規式之御次第』の記載は、王府の正式な伝承とはとても認めがたいものである。しかし、王府の内部でこのような語り（神話・由来譚）があったことも確かで、その存在は認めなければならない。

引用文献・参考文献

- 栗国村村史編纂委員 一九八四 『栗国村誌』（栗国村）
 伊波普猷・東恩納寛惇・横山重 一九七二 『琉球國舊記』『琉球史料叢書 第三卷』（東京美術）
 伊波普猷・東恩納寛惇・横山重 一九七二 『中山世譜』『琉球史料叢書 第四卷』（東京美術）
 伊波普猷・東恩納寛惇・横山重 一九七二 『琉球國中山世鑑』『琉球史料叢書 第五卷』（東京美術）

沖縄大百科事典刊行事務局 一九八三 『沖縄大百科事典(中)』(沖縄タイムス社)

小島環禮 一九八二 『神道体系 神社編五十二 沖縄』(神道体系編纂会)

嘉手納宗徳 一九七八 『球陽外巻 遺老説傳』(角川書店)

斎藤ミチ子 一九七九 「島のたたずまい」 『神の島の祭り イザイホー』(雄山閣)

斎藤ミチ子 一九九一 「久高島に見る儀礼食の構造」 『久高島の祭り』(雄山閣)

りと伝承』(桜楓社)

二〇〇〇 『櫻井満著作集 第十巻 道の島の祭り』(おうふう)

未次智 一九九五 『琉球の王権と神話』(第一書房)

高橋六二 一九七九 「外間掟神西銘シズさん聞書抄」 『沖縄県久高島資料』(白帝社)

並木宏衛 一九七九 「ミントウンの根人知念幸徳さん聞書抄」 『沖縄県久高島資料』(白帝社)

野本寛一 一九八四 「農耕―畑作の伝承と習俗」 『沖縄県久高島の民俗』(白帝社)

畠山篤 一九八二 「波照間島の豊年祭と祈年祭」 『波照間島調査報告書』(沖縄国際大学南島文化研究所)

比嘉康雄 一九九三a 『神々の原郷 久高島 上巻』(第一書房)

日越国昭 一九七九 「イザイホーと植物」 『イザイホー調査報告―久高島イザイホー民俗文化財特定調査―』(沖縄県教育委員会)

外間守善 一九九五 『沖縄古語大辞典』(角川書店)

外間守善・波照間永吉 一九九七 『定本 琉球国由来記』(角川書店)

宮良高弘 一九七二 『波照間島民俗誌』(木耳社)